

2010 年度助成事業報告

2010 年高等学校韓国語・中国語教師研修  
事業報告書

2011 年 5 月

公益財団法人国際文化フォーラム  
(TJF)

## 1. 事業実施までの経緯と目的

公益財団法人国際文化フォーラム（IJF）は、グローバル化した国際社会に対応するためには、世界の多様な言語や文化に精通する人材を育成することが重要であると考え、日本における外国語教育の促進に取り組んできました。中でも日本の若い人々が隣国のことばである中国語と韓国語を学ぶことが必要と考え、高等学校における中国語及び韓国語教育の意味とそのあり方について『高等学校の中国語と韓国朝鮮語 学習のめやす（試行版）』（2007年3月）の中で提案し、関係者及び関係機関へ配布して啓蒙・普及を図りました。

2008年には、貴財団の助成を得て、中国語教師を対象とした研修を開催し、「学習のめやす」を活用する方法を教師たちと共有するための取り組みを始めました。2009年3月には、「学習のめやす」の完成版の作成に向けて新たなプロジェクトチームを立ち上げ、試行版のアドバイザーでもある當作靖彦氏（米国カルフォルニア大学サンディエゴ校教授）を迎えて会合を開き、①試行版の課題と検証、改訂作業の進め方、②「学習のめやす」を普及させるために必要な教師研修の目標・内容・方法についてあらためて検討しました。完成版に向けての改訂作業に取り組む一方、「学習のめやす」の基盤となっている、コミュニケーションアプローチをはじめ、内容重視型、学習者参加型、学習活動中心など、新しい外国語教育の理論や考え方を、あらためて全国の高校中国語・韓国語教師と共有するために、2009年度に貴財団の助成を得て、中国語・韓国語教師合同の初めての研修を開催しました。當作教授を主任講師に迎えた研修の後半では、ワークショップ形式で具体的な授業設計にも取り組み、参加者には大変な好評を博しました。

2010年度の研修は、昨年に引き続き「学習のめやす」の基盤となる理論についての講義と、実践的なグループワークを組み合わせ、以下三つの目的を設定しました。

- （1）高等学校の外国語教育（中国語と韓国語教育）の目標設定・内容・方法に関する考え方や理論に対する理解を深め、学習者がコミュニケーション能力を獲得できるようにするための授業のあり方を考える。
- （2）高等学校の中国語や韓国語の実際の授業づくりに参加者間で取り組むことを通して、「学習のめやす」の教育現場への活用を促進するとともに、参加者からのフィードバックを得ながら共有する。
- （3）中国語や韓国語をはじめ高等学校で外国語を担当している教員のネットワークを強化する。

2010年度は、講師間で研修内容の十分な共有を図るため、5月にワークショップ（講師およびグループワークのコーディネーターが参加）を開催しました。また研修終了後には、高等学校の中国語・韓国語教師の研修に必要なカリキュラムの項目を洗い出し、中長期的な研修計画の作成の検討も行いました。

## 2. 事業内容

上記の目的を達成するため、次の事業を実施しました。

### (1) 2010年高等学校韓国語中国語教師研修講師及びコーディネーター対象ワークショップ

日 程 : 2010年5月15日(土)  
会 場 : 講談社N201会議室(東京都文京区)  
参加者 : 2010年高等学校韓国語中国語教師研修担当講師、グループワークの  
          コーディネーター 計18名(中国語教師:15名,韓国語教師13名)  
講 師 : 當作靖彦氏(米国カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)  
内 容 : 8月の研修の内容に関する講義とグループワーク  
概 要 :

ワークショップの講師に研修の主任講師である米国カリフォルニア大学サンディエゴ校の當作靖彦教授を迎え、講師とコーディネーターが研修時のグループワークをリードできるように、研修で導入する学習活動の作り方や評価法についてお話しいただきました。

今回のワークショップは、中国語・韓国語の「学習のめやす」がめざす言語教育とは何かを再確認し、そのめざすところを達成するクラスとはどのようなものなのかを考えました。そして、一連の学習活動としての「学習シナリオ」をもとに、学習過程の最後に行う総括的評価と、学習過程で行う形成的評価をどのように行い、どのように学習者にフィードバックを与えるかを検討しました。最後に、まずゴールを設定し、評価を設定してからカリキュラムをデザインするカリキュラムのバックワードデザインについて考えました。

ワークショップ参加者からは、カリキュラムのバックワードデザインについて興味深く、更に詳しい説明を聞きたいという声が多く届けられました。また、「総合的言語教育」のための「学習シナリオ」については、興味深い話ではあるが、まだ十分に理解できないという声も寄せられました。最後に今後の課題として、用語の定義と説明が必要であることと、用語集の作成と事前の周知が受講生には必要であることが、指摘されました。

### (2) 2010年高等学校韓国語・中国語教師研修

日 程 : 2010年8月4日(木)~8月9日(月) (1日4コマ、1コマ90分)  
会 場 : 桜美林大学 町田キャンパス  
共 催 : 桜美林大学  
特別共催 : 駐日中国大使館教育処、駐日韓国大使館 韓国文化院、  
          駐日韓国文化院 世宗学堂  
後 援 : 文部科学省  
助 成 : かめのり財団  
協 力 : 高等学校中国語教育研究会、高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク  
募集人数 : 高等学校の中国語、韓国語担当教員及びその他の外国語教員 計100名

内 容 : コミュニケーション能力の向上をめざした外国語教育の基本となっている  
考え方や理論に関する講義と、中国語や韓国語の授業案を作成するグルー  
プワーク

講 師 :

[主任講師]	當作靖彦	米国 カリフォルニア大学サンディエゴ校教授
[中国語担当講師]	植村麻紀子	神田外語大学専任講師
	胡玉華	関西学院大学常勤講師
	山崎直樹*	関西大学教授
[韓国語担当講師]	金孝卿*	国際交流基金日本語国際センター専任講師
	中川正臣	韓国 弘益大学教養科専任講師
	阪堂千津子	東京外国語大学等非常勤講師

[中国語担当コーディネーター]

岸昌代	大阪府立桃谷高等学校
須田美知子	東大阪市立日新高等学校
鷹野由紀子	関西学院千里国際中等部・高等部
藤井達也	埼玉県立伊奈学園総合高等学校
山崎順平	宮城県貞山高等学校
若森幸子	埼玉県立戸田翔陽高等学校

[韓国語担当コーディネーター]

李貞榮	大阪府立佐野工科高等学校
任喜久子	大阪府立阪南高等学校
川上知美	大阪府立桃谷高等学校
中野徹生	富山県立伏木高等学校
増島香代	神奈川県立横浜清陵総合高等学校
山下誠	神奈川県立鶴見総合高等学校

(敬称略, 五十音順 \*各言語のリーダー)

参 加 者 :

講師・コーディネーターを除く数

・5日間全体の参加延べ人数 87名 (うち中国語教師 37名, 韓国語教師 28名)

・後半3日間の参加延べ人数 43名 (うち中国語教師 15名, 韓国語教師 17名)

【注】: コーディネーター:

研修後半三日間のグループワークにおけるグループリーダーのこと。昨年の研修に全日程参加した受講者を対象に希望者を募り、研修の講師を対象に開催するワークショップにも参加していただきました。

## 概 要 :

本研修は、中国語と韓国語に限らず広く外国語教育に携わる教師を対象とするプログラムを前半に設定し、外国語教育のあり方について共に考える機会としました。プログラム後半は、中国語教師と韓国語教師を対象を限定し、中韓合同で研修を行いました。

前半 2 日間の研修では、高校の中国語、韓国語の教師のほかに、英語、ドイツ語、日本語を担当する教師約 90 名が参加しました。今年は、高校教師のほかに、高校との連携を考える大学の外国語教育関係者や、高校の外国語教育に関心のある大学院生、海外の中等教育における日本語教育関係者等の参加を得て、コミュニケーション能力が身に付く学習のプロセスをはじめ、広く外国語教育における理念や方法を考える内容の講義が行われました。

後半 3 日間の研修は、主に高校で、中国語または韓国語を担当する教師、各言語約 20 名を対象に言語別にグループに別れ、副主任講師 1 名、講師 2 名、グループコーディネーター 6 名を配置し、語彙や表現を習得するための活動と目標設定から始まる一連の学習活動(学習シナリオ)作成に取り組みました。

コーディネーターには、研修の総まとめとして研修で学んだことを反映させた学習シナリオを含む単元案の作成を依頼しました。この単元案は、2011 年度に公開予定のめやすウェブサイトに掲載する予定です。

### (3) 2011 年以降の高等学校中国語・韓国語教師研修カリキュラム検討会

日 程 : 2010 年 12 月 28 日-29 日, 3 月 12 日-13 日

参加者 : 2010 年高等学校中国語・韓国語教師研修担当講師

会 場 : TJF 会議室

内 容 : 2010 年高等学校韓国語中国語教師研修の振り返りと 2011 年開催に向けての検討

## 概 要 :

2009 年度より開始された本研修は、初年度において主に、「学習のめやす」の理念と理論の共有化を図り、2010 年度は「学習のめやす」の内容と方法を学びました。以上 2 年の実績を踏まえて、2011 年度は「学習のめやす」をよりどころとした参加者各自の教育の振り返りと、各現場における実践へのつながりを目的とした研修内容とすることが合意されました。そこで、「学習のめやす」の考え方や理念、内容・方法を、教科書を使って実践するための方法(テキストブック・アダプテーション)を、2011 年の課題とすることが検討されました。そして、高校生を対象とした代表的教科書の作成者である「学習のめやす」プロジェクトメンバー 4 名に「学習のめやす」に基づいた、それぞれの教科書による年間指導計画の作成を依頼し、研修時の参考資料とすることにしました。

この年間指導計画は、2011 年度に公開予定のめやすウェブサイトに掲載する予定です。

### 3. 事業の成果と課題

2009年度の研修後に受講生から挙げられた、「講義内容が多すぎて消化しきれなかった」、「使われた用語が難しく結果的に講義の内容を十分に理解できなかった」という課題については、講師の配慮に加え、用語集を配布することで解消されました。

2010年度の成果としては、次の2点が挙げられます。

1. 参加者が新しい外国語教育のあり方について、その理念や考え方に対する理解を深めた。
2. 参加者が「学習のめやす」の内容を理解するとともに、具体的な活用方法を体験したことにより、「学習のめやす」式アプローチの現場への普及が期待できる。

以下に参加者から寄せられたコメントの一部を紹介します。

- ・ 真のコミュニケーション能力を学習者に身につけさせるために、具体的にどのようなアクティビティ（学習活動）を実践すればいいのか、たくさんの例を見て、本当に目からうろこが落ちる思いがした。
- ・ テストのタイミングや内容をきちんと考えてテストを実施することの大切さがわかった。すぐに実践したいと思う。
- ・ 政治家がわれわれに対してマニフェストを提示するように、教師も学生に対して、マニフェスト（何をやるのか、何を目標とするのか）を提示すべきで、それに向かって行うのがこの授業であるという契約を学生と交わすこと、その後は、教師と学習者が本当にそれに向かって進んでいるかどうかを互いに明らかにしながら授業を進めることが重要だと感じた。
- ・ 英語も韓国語も教えているが、双方とも内容が知識偏重となっている。例えば読解は、書いてあることについて質問するだけで、生徒に考えさせる機会を与えていない。これから生徒が思考能力を伸ばし、考える力も育むことができる外国語教育の実践を心がけたい。また、そのようなニーズに応えられる指導力を身につけたいと思う。
- ・ 校内に中国語の教師はひとりしかいないため、研修で仲間と話すことで刺激を受けた。一緒に授業を受け、アクティビティを実践することで、相互の情報交換や理解が深まった。
- ・ 新しい外国語教育のあり方にふれて、これまでの授業のやり方や教材に対する考え方を見直すことができた。
- ・ 韓国語、中国語、英語等と分けるのではなく「日本での外国語教育・外国語学習」という視点で連携し考えていくことの重要性を感じた。そして、それを高校教師だけでなく、高校全体、大学、地域等に広げていくことが大切だと思った。
- ・ 「学習のめやす」の提案は、まさに自分がやりたいと思っていた中国語教育そのものだった。高大連携を考えると、大学の教師もこの考え方を学ぶ必要がある。高大が連携してこれからの中国語教育を変えていきたい。

一方、「具体例を提示しながらゆっくり話を聞かせてほしかった」という要望には十分応えられず、今年も「模擬授業を取り入れるなど講義内容を更に詳しく、具体的にしてほしい」という声が複数届けられました。また、「グループ活動の時間を長めに設定してほしい」「ポスター発表に説明者をつけてほしい」など、後半のグループワークのプログラムは時間をかけてより丁寧に取り組みたいという要望がありました。

講師からは、後半のグループワーク作業の中で、受講生と評価についての意見交換がたびたびあったことが報告されました。また、評価について特化したワークショップを設定したり、評価の方法やマニュアルを提示したりする必要があるのではないかという意見が、中国語、韓国語双方に挙げられました。

#### 4. 今後に向けて

2011年度は、カリキュラム検討会合の検討結果を踏まえ「学習のめやす」に照らした参加者各自の教育の振返りと、各現場における実践へのつながりを目的とした研修を企画しています。具体的には、ほとんどの現場で教科書を使った授業が行われている現状を踏まえ、高等学校の中国語と韓国語における代表的な教科書を使って「学習のめやす」を活用した授業作りを行う、テキストブック・アダプテーションに取り組む予定です。さらに、本研修が広く外国語教育の推進を考える場となり、講師から受講生への単なる知識伝達式の学びにとどまらない、講師、受講者、企画者間の相互交流による創造的な場ともなる、新しい研修のあり方を考えたいと思います。